

87. 滋賀県下の古墳出土 鏡について(1)

近江風土記の丘資料館では、昭和56年秋の特別展「特集近江の考古」展において、県下出土の各種遺物が展示されたが、その中には県下の古墳出土の古鏡の大部分も含まれていた。そして、この古鏡は県下出土の銅鐸とともに、図録「近江の銅鐸と銅鏡」として公刊されることとなった。これを機会に、県下の古墳出土鏡について、展示され図録に記載されるものもとより、今回展示されなかったものや、文献等により従来記録されているが現物の不明のもの、かつては現物も存在したが現在その所在の不明のもの等も含めてその大要を述べ、大方の参考に供することとした。同図録の銅鐸に関しては別の機会があるようなので、集成はそれに譲り、今回は触れないこととする。文中「滋賀県史蹟名勝天然記念物概要」については「概要」と略記したい。

高島郡の古鏡

1. 今津町弘川円山古墳出土鏡

高島郡誌及び概要に下記のようなほとんど同様の文があり、これを受けて遺跡目録にも古鏡出土を記している。しかし鏡は現存せず、その詳細は不明である。

高島郡誌 同町大字弘川字堀切に在り……明治19年秋、此の地の所有者同大字前川七郎発掘して鏡1面（径4寸許裏に人物模様あり）鍔袖刀剣の破片を得たり。

概要 円山塚古墳 同郡今津町弘川字堀切にある…明治19年秋に鏡1面甲破片刀剣破片を得た、鏡は径4寸で裏に人物模様がある。

鏡背の文様は人物模様とあるので、あるいは神獸鏡の類かとも推考される。

2. 安曇川町南古賀冠掛古墳出土鏡

後藤守一氏著「漢式鏡」の地名表中に鏡の種類には触れず、伴出遺物として陶器、土器、刀身が挙げられている。しかし詳細はなんら述べられていない。南古賀の冠掛は現在御霊神社の祀られている墳丘をさすものと思われ、古墳の墳頂に神社がある。安曇川町教委の中江彰氏に調査していただいた結果は、かつて神社の社殿改築の際鏡その他の遺物が出土したようである

が、それらは埋め戻した由である。ただ鏡は埋め戻さずに提出されたとの説もある。いずれにしてもその詳細は不明である。なお、「漢式鏡」の地名表には参考文献として、清野謙次氏の「石器時代古墳時代遺物発見地名表」（人類学雑誌218）をあげている。

3. 安曇川町田中古墳群出土鏡

高島郡誌増補先史時代篇に、田中古墳出土銅鏡として写真が掲載されているが、それに関する記述は見当らない。この鏡は現在田中神社の所蔵品である。仿製の神獸鏡とも見られるが、磨滅がひどくはっきりしない。径は10.5cmである。昭和19年3月、田中古墳群内で開墾された畑地から出土した由で、伴出遺物としては鉄刀破片があり、少なくとも3口以上と思われる。学術的な調査がなされていないので、古墳の状況等は不明である。

4. 高島町稲荷山古墳出土鏡

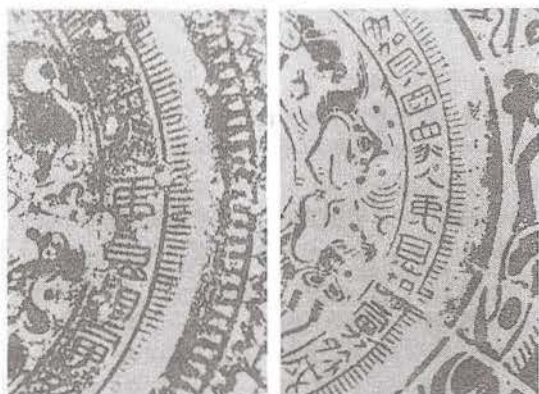
高島町鴨の稲荷山古墳に関しては、京大文学部の考古学報告第8冊に梅原末治氏が詳細に報ぜられており、滋賀県史、高島郡誌、概要にも記載されている。また鏡については、樋口隆康氏の「古鏡」や後藤守一氏の「漢式鏡」にも掲載されている。破損がひどいので、移動展示ができず、今回は展示されなかった。従って図録には載せられていないが、前記報告書や京大文学部の「考古学資料目録2」等に写真が掲載されている。内行花文鏡で、径15.6cm、仿製鏡である。明治35年8月発見され、京大文学部に所蔵されている。伴出遺物についても前記報告書に詳しいので、ここでは再説しないが、金製耳飾等一部の遺物は東京国立博物館に所蔵されている。なお、この古墳に関しては、中川泉三氏が「近江高島郡水尾村の古墳発掘物」（考古学雑誌6-9）に報告され、その中で鏡について「其他漢鏡（径五寸位）の破片半分計り……」と述べられている。また、後藤守一氏も「金製耳鎖を出せし古墳」（考古学雑誌10-3）に古墳に関して報ぜられている。

滋賀郡・大津市の古鏡

1. 志賀町大塚山古墳出土鏡

志賀町小野の大塚山古墳に関しては、梅原末治氏の「近江和邇村の古墳墓 特に大塚山古墳に就いて」（人類学雑誌37-8）及び「近畿地方古墳墓の調査2

第6 近江和邇大塚山古墳」（日本古文化研究所報告第4）に古墳及び出土遺物の詳細が述べられており、滋賀県史・概要・新修大津市史等にもこれに関する記載がある。なお、鏡に関しては富岡謙蔵氏が「日本出土の支那古鏡」（史林1-4）に報告されている。また後藤守一氏「漢式鏡」、樋口隆康氏「古鏡」にも記述されている。明治40年地元の人々によって発掘され、出土遺物のうち鏡と勾玉は京都博物館に保管されていたが、後に小野某氏の手へ渡り、その後所在不明となっ



大塚山出土鏡拓本(部分)

四川省出土鏡拓本(部分)
四川省出土銅鏡より

た。従って現在遺物を手にすることはできない。鏡は盤龍鏡で、径13cm、舶載鏡である。鏡背の銘帯に「青蓋作竟四夷服 多賀國家人民息 胡虜殄成天下腹 風雨時節五穀孰 長保二親得天力」の銘文がある。この銘文について、これまで「人民息」が「人馬息」とされてきた。これは鏡銘のこの部分に表面のきずがあり、「民」が「馬」のように見られるところから、このように読まれたものと思われる。筆者は、現在所在不明の同鏡についてその拓本コピーを見る機会を得、また文物出版社刊行の「四川省出土銅鏡」中にこの鏡の鏡銘と同様の重慶市博物館蔵の青蓋鏡の写真及び拓本を見ることができた。両者の「人民息」のところを比較すると写真で示すようにほとんど軌を一にしており、「人」の次は「馬」ではない。四川省鏡は「人民息」と読んでおり、また、通常この種の銘文は「人民息」であるところから、大塚山鏡も「人民息」と読むべきであろうと考えられる。古墳の詳細や出土遺物については、前述の諸論文が報告しており、再説をひかえない。なお、滋賀県史ではこの銘文を「青蓋作竟四夷服 多賀國家人馬息 胡口殄成天下復 風雨時節土穀孰 長保二親得天力」としているが、「威」は「成」の「土」は「五」の印刷ミスと思われる。「胡」の次の字を読んでいるのは「虜」が異体であるためであろう。

2. 大津市木岡付近出土鏡

新大津市史別巻に次のような記事がある。「木岡陵

墓伝説地の南麓、いまは耕地の中であるが、丸山・茶臼山・御前塚・車塚・首塚などと呼ばれる小丘が散在して、いずれも前記の主墳とともに明治27年の陵墓伝説地の附属地として宮内庁の所管に入っている。附近からはかつて土器片や古鏡などを発見したことも伝わっているが、いまは所在が分らない。この鏡の出土は県の遺跡目録にも記載されているが、現物については市史にも述べているようにその所在は不明で、従って詳細は何も知られていない。

3. 大津市瀬田織部山古墳出土鏡

この古墳は明治45年3月発掘され、四神四獣鏡その他を出した古墳である。そのことは考古学雑誌4-12の彙報欄に「近江國瀬田村の発掘品」として学界に報ぜられた。更にこの古墳の詳細は梅原末治氏が「栗太野洲両郡に於ける二三の古式墳墓の調査報告2 近江國に於ける主要古墳の調査録其二」（考古学雑誌12-3）の中に「栗太郡瀬田村織部山古墳」なる章を設けられ、それに加えて後藤守一氏が(附)として「近江國栗太郡瀬田村大字南大萱字織部古墳伴出遺物」なる報文を副えられている。また、滋賀県史や近江栗太郡志、概要にもこの古墳についての記述がある。鏡は東京国立博物館に所蔵され、四神四獣鏡で径は23.1cm、舶載鏡である。

ところがこの鏡の銘文について二三考えてみたい。前述の考古学雑誌4-12の彙報欄では、「新作明竟 幽律三剛 配德君子 清而且明 銅出徐州 師出洛陽 彫文刻鏤 皆作文章 取者大吉 宜子孫」と銘を読んでいるが、栗太郡志や概要では「皆作文章」と「取者大吉」の間に「左龍右虎 師子有名」の二句を入れ、概要では最終句が「□宜子孫」となっている。この二句が無いことは鏡を見れば明らかである。筆者は田中琢氏の教示により「東京国立博物館紀要第6号」に記載されている西田守夫氏の「三角縁神獸鏡の形式系譜緒説」なる論考のコピーを頂戴したが、その中にこの織部鏡の銘文が示されており、かつこの鏡の写真や銘帯の拓本があって、「左龍右虎 師子有名」の二句がなく、最終句は「宜子孫」の三字であることを確認している。それではなぜ郡志や概要にこの二句が入れられたのか。みだりに憶測することは慎まねばならないが、あるいは高橋健自氏の「王莽時代の鏡に就いて」（考古学雑誌9-12）なる論文に一因があるのかもしれない。すなわち、この論文では織部鏡について「これも前の二面の鏡と同式である。銘は『新作明竟』とあって、『大竟』の代わりに『明竟』とあるだけが相違点で、他は(一)と同文である」と述べられている。この(一)は奈良県佐味田宝塚発掘の四神四獣鏡で、その銘文として「新作大竟 幽律三剛 配德君子 清而且明 銅出徐州 師出洛陽 周文刻鏤 皆作文章 左龍右虎

師子有名 取者大吉 宜子孫」が挙げられている。この論文では、織部鏡については銘文の全文は述べられていないのであるが、その行間に窺える文意から、佐味田鏡の「大竟」を「明竟」として、その全文を織部鏡に関して挙げたのが郡志や概要の説となったのではなかろうか。なお概要の最終句を四字と見たのは「長宜子孫」の例を頭に置いて述べられた結果かもしれない。むしろこれは前述のごとく単なる推測の域を出ないのであるから、郡志や概要の論者に対して礼を失したことになるかもしれないこの点を深く恐れるのである。

この鏡について、概要に「鏡の年代は或は王莽鏡（高橋健自氏）或は魏鏡（富岡謙蔵・梅原末治両氏）といふ」としているが、今日では王莽鏡との考えは行われていない。なお小林行雄氏は帝塚山大学考古学談話会第200回記念講演会における要旨の付表で、この鏡と京都北山鏡・岡山車塚鏡との同范関係について述べられている。また、富岡謙蔵氏「日本出土の支那古鏡」（古鏡の研究所収）後藤守一氏「漢式鏡」樋口隆康氏「古鏡」等にも記載されている。

草津市・栗太郡の古鏡

1. 草津市追分古墳出土鏡

当古墳に関する概要の記事によれば、その出土品として「出土品は鏡、刀剣四口（櫛内両側面に二口づつ置いてあった）刀子数本、鉄鏃数個、銅鏃十数本、鉄鏃十数本等である。いずれも東京帝室博物館の所蔵に帰してゐる」と述べられている。しかしこれに関しては、丸山竜平氏が「草津市追分古墳の再評価」（滋賀文化財だよりNo.38）の中で、当時の各種記録から鏡の存在に対し疑問を呈出しておられる。この様に当古墳出土の鏡については、当時の記録にもなく、現在その存在を示すものは何もなく、ただ概要の記事中のみあるので、はたしてこれが真か否かは疑問視すべきではなかろうか。

2. 草津市山寺北谷11号墳出土鏡

この古墳は、去る昭和35年8月名神高速道路の建設に伴う採土のため消滅した古墳で、調査結果については、とりえず筆者が「草津市山寺町 北谷古墳群発掘調査概報」の中でその概要を報告したものである。その後中司照世・川西宏幸両氏により「滋賀県北谷11号墳の研究」（考古学雑誌66-2）に出土遺物に関する詳細が報告され、論考が加えられている。鏡については、その中で川西氏が担当している。また、樋口隆康氏の「古鏡」にも記載されている。仿製の方格規鏡で、直径は23.8cmである。滋賀県教育委員会の所蔵で、現在近江風土記の丘資料館で保管展示されている。古墳の状況や伴出遺物については前記の報告に譲って再説しないが、墳丘について一言しておきたい。この

古墳に関しては「草津市史第1巻」においても小笠原好彦氏が触れられているが、前記中司・川西両氏の論文でも小笠原氏の論述でも、ともに前方後円墳と見ておられる。しかし、この古墳は概説でも少し触れたように、後世墳頂に仏堂があったことは伝承や出土遺物ではほぼ確実である。そして、これに参詣するため、その前面を参道として手を加えたように見受けられた。従ってあるいは前方後円墳とも見られたので、古墳主体部のある墳丘部とその前面のつながりについて観察を試みたのであるが、どうも前方後円墳としての確証が得られなかったので、一応円墳と見て報告した次第である。

3. 栗東町灰塚山出土鏡

近江栗太郡志第2編第17章「灰塚山の古墳」の項に「丘上に古墳あり、寛政中古鏡曲玉等を発掘せり、按ずるに石槨なき古墳なるが如し、栗太志に『今ヨリ十四五以前ニ川邊村ノ人此ノ丘ノ頂ヲ少シク掘穿テ古鏡ヲ得タリ又其後鈎玉一二顆ヲ得タリ故ニ丘ノ頂ニ葬ル事ヲ知ル』」とある。しかし、この古墳や出土品については現在では何ら知られていないようである。従ってここではこのような伝承のあることだけを記しておきたい。

4. 栗東町川辺下味古墳出土鏡

下味古墳は名神高速道路の建設によって消滅した古墳で、昭和35年4月に行われた調査結果は「滋賀県史蹟調査報告第12冊」中に、鈴木博司・近江昌司の両氏により「下味古墳」として報告されている。この古墳は小形の粘土槨を1個宛伴った東西の2主体があり各主体内にそれぞれ1面宛の鏡が副葬されていた。東の第1主体には仿製の内行花文鏡（径9.3cm）があり、西の第2主体には仿製の櫛歯文鏡（径6.6cm）が副葬されていた。鏡は県教育委員会が所蔵し、近江風土記の丘資料館に保管されている。なお、第1主体の内行花文鏡に関しては樋口隆康氏「古鏡」に記載されている。伴出遺物や主体構造等は報告書に譲って、ここでは再説をひかえる。

5. 栗東町安養寺薬師谷出土鏡

栗東町の名刹安養寺の近くで発見されたもののようであるが、発見の詳細は不明である。この鏡は京都国立博物館に保管されている。伴出遺物としては鏡と一緒に保管されている銅釧が知られるだけである。なにぶん、発見者と思われる所蔵者の泉秀英氏も、銅釧の所蔵者であった三好勝太郎氏も共に故人となられ、その上文献もなく前述のごとく、出土の事情は全然わからない。鏡は仿製の四乳鏡で径11.2cmである。

6. 栗東町安養寺新開1号墳出土鏡

新開1号墳は前記の下味古墳と同じく名神高速道路建設に伴って昭和34年8月に調査された古墳で、「滋

賀県史蹟調査報告第12冊」に「新開古墳」として鈴木博司氏と筆者によって報告されている。従って古墳や出土遺物の詳細はそれに譲り、ここでは出土鏡についてその大要を述べることにする。当古墳には南北二つの遺構があり、北遺構から2面、南遺構から1面の鏡が出土した。北遺構の鏡は、径8.4cmの仿製の五獣鏡と径13.7cmの仿製の盤龍鏡の2面である。遺構の中央部にあった盤龍鏡には木片が付着しており、箱に納められていたとも考えられる。この鏡には擬銘帯がある。南遺構の鏡は仿製の画像鏡で径19.5cmである。3面とも滋賀県教育委員会の所蔵で、近江風土記の丘資料館で保管展示している。なお、3面の鏡のうち、五獣鏡と画像鏡は樋口隆康氏の「古鏡」に記載されているが、五獣鏡は鏡名を撰文鏡としておられる。また盤龍鏡と画像鏡は田中琢氏の「日本原始美術大系4」や「日本の原始美術8 古鏡」に載せられているが、ここでは盤龍鏡は龍虎鏡となっている。

7. 栗東町安養寺大塚越古墳出土鏡

概要の安養寺古墳の項に大塚越古墳の説明がある。現在この古墳は無くなっている。昭和8年土砂採掘中に遺構や遺物が発見された。出土遺物としては、古鏡2面のほか多数の玉類や鉄刀、短甲、巴形銅器その他がある。これらはすべて京都大学文学部考古学教室に所蔵され、同大学文学部の「考古学資料目録2」にそれら収蔵品の写真とその説明がある。鏡は、径9.3cm仿製の素文鏡と、径14.2cm舶載の二神二獸鏡である。二神二獸鏡には銘がある。前記目録の説明では「吾□□竟□□三□鏡徳序道配像萬離子孫番昌」と読まれているが、概要ではその最初の部分を「吾作明竟幽涑三箇」と読んでいる。なお、この二神二獸鏡は樋口隆康氏の「古鏡」に記載されている。

8. 栗東町安養寺山ノ上古墳出土鏡

この古墳は名神高速道路建設に際し、昭和35年11月調査されたものである。その結果は筆者により「滋賀県史蹟調査報告第12冊」中の「山ノ上古墳」で報告されている。鏡のほか鉄剣、玉類等が出土している。鏡は舶載の二神二獸鏡で、直径18.1cm、銘帯に「吾作明竟幽涑三商統徳序道曾年益寿子」なる銘文がある。なお同鏡は樋口隆康氏の「古鏡」にも記載されている。

9. 栗東町安養寺毛刈古墳出土鏡

この古墳も、昭和35年9月名神高速道路建設の際調査されたもので、結果は筆者が「滋賀県史蹟調査報告第12冊」の「毛刈古墳」で報告している。伴出遺物としては管玉を主とした玉類がある。仿製の変形文鏡で径9cmを計る。滋賀県教育委員会の所蔵で、近江風土記の丘資料館にある。

10. 栗東町六地藏岡山古墳出土鏡

この古墳に関しては、近江栗太郡志・滋賀県史・概要等に記載され、大正2年古鏡2面を発見し、高野神社に寄付されたことが明らかである。ところが郡志や概要では2面と記されているが、県史では「同じく葉山村大字六地藏岡山古墳からも神獸鏡二面盤龍鏡一面発見せられてゐる」と述べられており、この「神獸鏡二面」の「二」は原稿か校正のミスと思われる。この誤りは後藤守一氏の「漢式鏡」にも見られる。同書の地名表で岡山鏡について、径21.7cmの神獸鏡と径22.1cmの神獸鏡の2面の神獸鏡が書かれ、前者の神獸鏡には「梅原末治氏教示」と述べられている。その詳細な説明が「本邦内地発掘漢式鏡各説」でなされているが前者を獸帯式三神三獸鏡とし「外区の一部を缺失してゐる」と述べ、後者を獸文帯三神三獸鏡とし詳細な説明がある。これが現存の神獸鏡の説明であることは文意から明らかである。また、これが梅原氏の教示によることも註により推考されるのである。地名表では前者に「梅原末治氏教示」とされ後者には何も註記をされていない。また、各説の前者に僅かに見られる説明の「外区の一部を缺失してゐる」は「外区」の表現に問題はあるが、現存鏡の獸文帯に小欠があるのと一致する。さらに注意すべきことは、戦後ではあるが筆者がこの鏡を拝見するときにはいつも神獸鏡・盤龍鏡各1面であった。従って岡山古墳出土鏡を3面とする説は2面の誤伝であることは間違いないものと思われる。如上の推察から岡山鏡は2面として説明する。

三神三獸鏡は舶載鏡で径22.1cm、日月天王の銘がある。この鏡は小林行雄氏の「三角緑神獸鏡の研究」(古墳文化論考所収)で、大分県赤塚古墳鏡、三重県筒野古墳鏡・明治大学蔵鏡と同範であることが挙げられている。また、樋口隆康氏の「古鏡」にも記載されている。盤龍鏡は舶載鏡で径11.1cmである。2面とも前述のごとく高野神社の所蔵で県立琵琶湖文化館に保管されている。

11. 栗東町出庭亀塚古墳出土鏡

当古墳については近江栗太郡志・概要に明治44年鏡1面刀身1土器片等を発見した由の記述がある。梅原末治氏「上代鑄鏡に就いての一所見」(考古学雑誌34-2)にこの鏡に関連する論考がある。小林行雄氏の「仿製三角緑神獸鏡の研究」(古墳文化論考所収)で鳥取県大將軍塚古墳鏡、大阪府矢作神社境内鏡、伝京都稲荷山古墳鏡・愛知県大塚古墳鏡・黒川古文化研究所蔵鏡との同範関係を論じ、樋口隆康氏の「古鏡」にも記載されている。そのほか後藤守一氏「漢式鏡」でも梅原氏の教示として論及されている。鏡は仿製の三神三獸鏡で、径21.7cm、本間陸氏所蔵で京都国立博物館に保管されている。

(西田 弘)

次号につづく